

2021年度 開智国際大学卒業式 学長式辞(抜粋)

花の便りが待たれる春の日に、コロナ禍の中ではありますが、保護者の皆様のご列席を得て、2021年度の卒業式を執り行うことができますこと、大変光栄に、嬉しく存じます。

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。

卒業される皆さんを今日まで、物心両面で支えてこられた保護者の皆様、ご息女・ご子息のご卒業を心よりお祝い申し上げます。

2018年4月、皆さんは、教育学部、国際教養学部の第二期生として本学に入学されました。2000年に四年制大学を設立して以来、2017年に念願だった2学部制が実現し、大学は大きく生まれ変わりました。2015年に大学名を「開智国際大学」とし、留学生を積極的に迎え、キャンパスのグローバル化を進めてまいりました。現在は、15カ国からの学生が在籍し、多様なバックグラウンドをもつ学生が学び合う大学となりました。また、仕事を持ちながら、古希を前に入学され、本日、卒業証書を手にした社会人の方もおられます。

二学部制になったことで、大学のダイバーシティ、多様化はさらに進展し、キャンパスはいつそう活性化して来ました。皆さんは、学修面だけではなく、学生会活動や柏学祭、そして部活のリーダーとして、多くの時間とエネルギーを捧げられました。オープンキャンパスの運営にも工夫を凝らし、高校生に、大学の魅力をご自身の言葉で熱く語っていただきましたね。学生にここまで信頼されていることに誇りを感じるとともに、大学の更なる発展に頑張ろう、と私自身をも鼓舞してくれました。また、吹奏楽部のニューイヤーコンサートやボランティア活動などを通して、柏市をはじめとする近隣の市民の方々と大学との懸け橋として、地域貢献にも関わって頂きました。

私は、このような皆さんの生き生きとした活躍ぶりを、ワクワクしながら応援してまいりました。熱意ある先生方のご指導に支えられて、様々なことに挑戦されるお姿を、どれほど誇らしく思ったことでしょう。教員採用試験や公務員試験における着実な成果、そしてコロナ禍の中、苦戦しながらも就職活動に期待以上の結果を出されたことは、私の大きな誇りでもあります。

さて皆さんが入学されてからも、日本の社会は大きな変化を遂げてきました。

気候変動やエネルギー問題、所得格差や働き方改革、地球の温暖化などSDGSへの取り組みが本格化して来ました。

また、今般のロシア軍のウクライナ侵攻では、目を覆うばかりの暴挙や殺戮が繰り返され、テレビ画面に写るウクライナの人々の寄り添えない不安な表情に、私達に何ができるかを問いつつ、罪のない人々の安寧を祈る毎日です。日本も大国として責任を持った行動が求められ、日米関係はもちろん隣国の中国や韓国、北朝鮮との関係においても、日本の立ち位置を明確にした発言が

求められています。このように私たちの住む世の中の環境、外部環境は大きく変化しており、社会の常識も変えていかねなければならない時代となってきました。

とりわけ若い人たちは、人生に夢を描きにくい、厳しい状況に置かれています。こんなに厳しい時代にどう生きていけばよいのでしょうか？

私は、こんな時代だからこそ「別解力」の大切さをお伝えし、皆さんへのはなむけの言葉といたします。

「別解力」は、長野県にある諏訪中央病院の名誉院長、鎌田實氏の言葉です。自分の頭で考えて、自分らしく、別のやり方で最適の答えを見出し解決する力、能力です。

鎌田医師は、大学生であった頃、激しい学生運動の闘志家のリーダーとして、国家権力と闘っていました。国立大学の医学部を卒業し、医師免許を持っていても、権力に反抗する立場の人には、病院での就職口はなかなか見つかりません。ようやく見つかった就職先は、閉鎖寸前の長野県の諏訪中央病院でした。

鎌田医師は、なるべく注射をしない、薬を出さないという主義で医療を徹底して続け、その結果、当然のことながら患者は減っていきました。しかし鎌田医師は、生活改善運動による健康作り、末期ガン患者のターミナルケア、特に在宅医療などをどんどん進めていきました。地域に根を張る医療です。

病院は、病気の人がたくさんいて成り立つものだと考えがちですが、鎌田医師は、病院が中心になって、病気の人を減らそうと地域の人々を啓蒙しました。

当時の常識から考えると、病院の経営はますます悪化し、赤字がどんどん膨らんでいくはずですが、地域の人々は、病院の医師や看護師とともに、生活改善に真剣に取り組んだのです。その結果、病気になってもならなくても、鎌田医師のもとに人々が毎日訪れるようになり、病院は黒字経営に変わりました。

赤字の病院を立て直すには、出来るだけ患者の要求に応え、注射や薬による治療を行い、患者を増やすことが一般的には正しい、すなわち正解「○」だとしたら、患者の望む医療をあえてしない鎌田医師の医療行為は間違っている、すなわち不正解「×」だということになります。しかし、鎌田医師は、生活改善を指導し、病気にならない体づくりを目指す、という別の解答「△」を示したのです。人に優しく温かいことをしていれば、必ず人々から受け入れられ、その存在は認められ、最終的には利益は上がってくる、という信念に基づいて、鎌田医師は、病院を地域医療の拠点に育てていきました。

鎌田医師は、著書『○に近い△を生きる』の中で、△の生き方について語っています。「今の日本に必要なのは、「別解力」。たった一つの「正解」に縛られるのではなく、いくつもある「別解」の中から○に近い△を見つけていきましょう。」と語りかけています。

鎌田医師の語る別解力「△」は、実は皆さんが本学で受けてこられた探究型授業の中で、育ま

れる力です。テーマや課題・プロジェクトに対して、「情報やデータを収集し、それを読み込んで理解し、意見をまとめ上げて発表する」というプロセスを、皆さんは当たり前のように進めてこられましたね。

「ちがうよ、それは」と言われるのではないかと最初は恐る恐る発表してみたら、「なるほど！ そういう考え方もあるんだ」「その考えは面白い」「私からは生まれてこない考え方です」などと、先生や仲間からの思いがけない反応に、最初は驚いても、それが繰り返されるうちに、少しずつ自分の考え方に自信がもてるようになり、発言していくことが楽しくなっていったのではないのでしょうか。それこそ別解力です。

鎌田医師の「○に近い△を生きる」生き方を、皆さんはこの4年間を通して、しっかり身に付けてこられました。本学での4年間は、皆さんお一人お一人を、じっくり成長させた4年間でもあり、別解力「△」を育まれた4年間でもあったと思います。

社会人となられても、本学で身に付けられた別解力にさらに磨きをかけて、様々な状況や課題にチャレンジしてください。○に近い△を見つけていってください。

本日、卒業の日を迎えることができたのは、ご両親をはじめとする保護者の皆様のお支えがあったからこそです。感謝の気持ちを伝えましょう。心で思っても通じません。「ありがとうございました」と言葉ではっきり伝えましょう。笑顔を添えた「ありがとう」は、これからの人生にとっても重要なキーワードです。

教職員一同、皆さんをお待ちしております。いつでもどうぞ大学を訪ねてください。本学の卒業生として誇りをもって活動してもらえよう、私たち教職員は、さらに良い大学を目指して努力を続けてまいります。皆さんもお体に気をつけて、それぞれの場で活躍してください。ご健闘を祈ります。

皆さんのご卒業と社会人としての門出を祝福し、式辞といたします。

本日は真におめでとうございます。そして、皆さん、本当にありがとう。

2022年3月18日

学長 北垣 日出子